

令和 3 年 6 月 24 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2020

課題番号：18K00112

研究課題名（和文）内村鑑三の「無教会」と日本思想史の文脈における「無所属」「無党派」の研究

研究課題名（英文）A Study on the Potential of Uchimura Kanzo's "Non-church Movement" and the Associations for "Independent" or "Unaffiliated" Individuals in the Intellectual History of Japan

研究代表者

東島 誠 (Higashijima, Makoto)

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：10364837

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究は、内村鑑三の「無教会」運動という新たな連帯の可能性と、日本社会における「公共性」の構造との関係に光を当てることを目的としたものである。既往の議論が重視してきた「による自由」に対し、「無教会」は「からの自由」を目指したものであり、歴史学者網野善彦の「無縁」論はこの点で通底する。

しかし本研究は、網野の議論では混同されていた「無主」と「無縁」とを峻別し、「所有」と「所属」の連関を問い直す。日本社会において「所有」主体としての自立した「個」よりも、集団に「所属」する曖昧な「個」が支配的であった根柢には、「誰のものでもない」という、「所有」を脱-人称化する「神」の観念があったからである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

根柢にあるのは第二次集団の質、すなわち、人が自然に帰属する第一次集団から出でて創り出した二次的な共同性が、果して人々を自由なしうるか、という問いである。「教会」よりも「無教会」に注目するのは、「による自由」よりも「からの自由」に着目するからである。日本史上の公共性の構造においては、自治組織のような「共同体による自由」は芽生えても、共同体が上位権力と同質の抑圧機構として作動し、「共同体からの自由」はきわめて脆弱であった。無教会をはじめとする「所属からの自由」は、根無し草ゆえの短命という宿命を帯びつつも、日本社会に稀薄だった新たな連帯、公共性の形を目指す運動であり、その歴史的水脈を解明した。

研究成果の概要（英文）： The purpose of this study is to shed light on the potential of the renewed solidarity named "non-church" movement of Uchimura Kanzo. It is closely related with the structure of "publicness" in Japanese society. While the conventional studies focused on "the liberty founded by ...", "non-church" movement aimed at "the freedom from ...". At this point, it is similar to "Muen" theory of historian Amino Yoshihiko.

However, this study draws a sharp line between "nonexistence of owner" and "cutting loose from the social ties". In the argument of Amino, these were mixed up. This study reexamines the difference between "possessing" and "belonging to". Behind the tendency that the vague "individual" that belonged to groups was much dominant in Japanese society than the independent "individual" that had "right of property", there was the notion of "God" that could "de-personalize" the possession, as it had been said "What is not possession of anyone means possession of God".

研究分野：歴史学・日本思想史

キーワード：無縁 無教会 無所属・無党派 人格的・非人格的支配 公共性・公共圏 神観念 内村鑑三 網野善彦

1. 研究開始当初の背景

第二次世界大戦後の民主化をシナリオとする 戦後知 にあって繰り返されてきた、ブルジョア革命なき日本、という問題は、日本史上における 市民的公共圏 の未成熟、近代性の不在、という課題と不可分に論じられてきた。その一方、20 世紀末に濃密に展開された 近代批判 の完了を経て、21 世紀に入ると、その思潮を主導したポストモダニズムもまた一気に退潮した。とりわけポストモダンの最良の部分であったはずの社会構築主義に代わって、いまや、新たな装いを帯びた「実在論」回帰の時代となった。また 20 世紀末の exile, diaspora を肯定的に語る 知、あるいは「新しい中世」の議論を典型とする、「近代主権国家」の役割の低下、ないしその役割が地域連携に置き換えられるとする予測も、21 世紀にいたっておおむね失効した。

かくしてわれわれは、いまだ 捨てたはずの近代 を足抜け出来ないでいる反面、むしろ 2010 年代中葉にいたって、良質な近代の擁護、「近代立憲主義」それ自身が、喫緊の政治課題として浮上してきた。このことが、本研究開始当初の重要な背景を構成する。

特に 2015 年には、第 2 次以降の安倍内閣で推進された「安保関連法案」を争点とする抗議デモが高揚し、自由と民主主義のための学生緊急行動 (SEALDs) も立ち上げられた。が、こうした変革可能性の灯はまことに短命で、法案可決とともにデモ行動は失速し、異議申立ての運動を継続し続けることの困難さが明るみとなった。

ひるがえって冒頭の問い、ブルジョア革命なき日本、近代性の不在といった諸言説に立ち返るなら、こうした困難さにもかかわらず、日本史上にはいくつもの変革可能性の契機が存在したこともまた、見逃されてはならないのであって、『公共圏の歴史的創造 江湖の思想へ』(東京大学出版会、2000 年)から『つながり の精神史』(講談社現代新書、2012 年)に至る、本研究開始以前の著作では、「日本史上における変革可能性の挫折と更新」を主題としてきた。

これまでの研究を支える関心の基底にあるものを端的に述べれば、それは、日本社会はなぜ変わらないのか、という問いに尽きる。より丁寧に言えば、変革の必要性はしばしば認識されるにもかかわらず、なぜ大きな運動にまで至らず、すぐに冷めてしまうのか。『日本の起源』(與那覇潤との共著、太田出版、2013 年)は、この問題を語り合った著作であった。

しかし、そのように一過性のものとして終わりがちな変革可能性の芽が、歴史上大きな力となって顕れ出でた時代が三度あった。等しく「江湖」という言葉が浮上した、14・16・19 世紀、すなわち南北朝、戦国、幕末維新时期である。その最後、19 世紀末を頂点とする「江湖」の第三の波の浮上にあつて、花井卓蔵らの政治結社「江湖倶楽部」と共闘し、足尾銅山鉍毒事件の被害者請願を支えたのが、キリスト者内村鑑三らの「理想団」運動であった。そして、この共闘に通底しているのが、無党派、無所属、それに無教会という、属性からの自由、という問題である。

2. 研究の目的

足尾銅山鉍毒事件に取り組んだ内村鑑三の理想団運動は、盛り上がりを見せつつ、なぜ挫折したのか。南原繁や矢内原忠雄は、キリスト者でありながら、なぜ戦後、天皇を精神的中核においた共同体を構想したのか。近くは 2015 年、自由と民主主義のための学生緊急行動 (SEALDs) は、なぜ短期間のうちに失速したのか。これら三者に共通する思想的背景は、じつは無教会キリスト教である。そこには「無所属」ゆえになしうる新たな連帯の可能性と、根無し草の脆弱性とが、同時に観察可能である。

本研究は、無教会キリスト教を起点としつつ、より広く、「無所属」「無党派」を標榜する思想を、歴史貫通的な問題史として位置づける。そこには、必ずや日本社会の公共性の構造や、歴史学者網野善彦の「無縁」論にも通ずる特有の「神観念」のありようが立ち上がってくるはずである。すなわち内村鑑三の「無教会」と網野善彦の「無縁」を架橋し、その連関と差違の分析を通じて、日本社会の公共性の構造、近代性の問題を、歴史的に解明することを研究の目的とした。

3. 研究の方法

まず、足尾銅山鉍毒事件に際しての演説会において、理想団員は、組織ぐるみではなく、あくまで個人の行動として参入しているため、その行動原理を明らかにし、「所属からの自由」の可能性に光を当てる。次に、無教会の流れを汲む者のうち、1890 年前後に生まれ戦後を迎えることの出来た世代の、南原繁や矢内原忠雄が、天皇を中核に置く共同体を構想してしまう問題を、内村鑑三や木下尚江ら「理想団」運動との世代的差異と捉えつつ、その差異の根源を思想史的に解明する。第三に、「天皇」と「神」が矛盾なく整合する思想の背景にある、日本社会の公共性の構造、神観念の問題を、前近代からの歴史貫通的な事例博搜によって探究する。第四に、民主化を課題とした戦後歴史学から 21 世紀にいたる「近代性」探究と 公共圏 の連関を追究する。

4. 研究成果

(1) 第35回内村鑑三研究セミナー

「内村鑑三の「無教会」と日本思想史の文脈における「無所属」「無党派」の研究」と題する本研究の成果は、2020年6月13日の第35回内村鑑三研究セミナー（於・立教大学）の場で、当研究課題と同題にて口頭発表される予定であったが、2019年末以降のCOVID-19の感染拡大によって中止。2021年度に延期となった。延期された口頭発表は、2021年6月12日、ZOOM開催による第35回内村鑑三研究セミナーとして、オンラインで実施され、時間の都合もあって、当初予告された「内村鑑三の「無教会」と日本思想史の文脈における「無所属」「無党派」の研究」のうち、序の部分にあたる、「『所属』からの自由 無教会・無縁・公共性」の題にて報告した。

なお同報告は、発表当日時間の制約で言及し得なかった点等を加筆、再構成の上、2021年11月末の原稿締切にて、2022年4月刊行予定の『内村鑑三研究』55号に掲載する旨の打診を、同編集委員会より受け、執筆公表を受諾した。よってこの成果は、2022年度に、活字媒体として広く公表されることになる。

「『所属』からの自由 無教会・無縁・公共性」と題する本報告は、冒頭まず、2011年の東日本大震災を機として、新たな公共性の構築が要請される学問状況のなか、震災翌々年の2013年を一つのエポックメイキングな年として、この間、内村鑑三の「無教会」思想の重要性が増してきている、との現状認識を提示することから、議論を始めた。具体的には、同研究セミナーでの前回報告にあたる、東島誠「内村鑑三と超党派の思考」（第28回内村鑑三研究セミナー、2013年6月8日、於・駒込キリスト聖書集會伝道所、『内村鑑三研究』47号、2014年）と時期を同じくして、赤江達也、岩野祐介の著書がいずれも2013年に刊行され、新時代の「無教会」研究が始動している点をレビューし、「所属」からの自由という、プロブレマティクを整理した。

ついで、「『新しい中世』3.0時代における内村鑑三像」として、最新の研究を踏まえながら、「近代」への反逆？、「新しい中世」3.0時代における「近代性」の問題、日本の思想的伝統からの選択、という視座、非均質圏 heterosphere の思考へ、の4点にわたって論じた。

つづく「『所有』の滅却としての『所属』」では、中世の神観念と「所有」「所属」、「無縁」仏の二つの位相、として、網野善彦の「無縁」論との架橋に関わる部分を論じた。特に、池上良正や朴炳道らの、「無縁」仏を「無主」と「無遮」に分かつ議論では、「所有」と「所属」の問題が見えなくなるとして、これを重点的に批判した。さらに、矢内原忠雄における二重化・重層性 の問題、皇室財産放棄の決断がないこと、では、無教会と天皇制という問題を論じた。柳父園近、千葉眞、菊川美代子、村松晋、苅部直らの研究、そして赤江達也の近著が目撃してきた、矢内原忠雄や南原繁の問題のみならず、これを、無教会をもそこに含みこむ、戦後日本の公共性の構造の問題と捉え直し、嘉戸一将が論じた田辺元の「絶対無 主権論」の議論をも参照しながら論じた。

なお、一回の口頭発表では論じきれない具体的な分析は、上記した『内村鑑三研究』55号掲載予定論文で展開することになっている。

(2) 日本社会に特有の公共性の構造と、これを相対化する 公共圏 にかかわる問題

ユルゲン・ハーバーマスの「公共圏」研究を、社会学の領野において長年主導してきた花田達朗の、ジャーナリズムコレクション3として、『公共圏 市民社会再定義のために』（彩流社、2020年）が刊行され、これに解説論文として、「三つの「新しい中世」と公共圏 一九九〇年代の歴史的思考と現在」を寄稿した。

全体の構成は、東欧革命と歴史学、1990年代の二つの近代像、公界か江湖か、丸山眞男と文藝的公共圏、新しい中世の三つのヴァージョン、近代としての中世、非近代としての中世、「新しい中世」2.0のなかで heterosphere を問い、3.0のなかで近代を擁護する、ということ、近世化論と東アジア的近代、からなる。

同論考に掲載した図を右に掲げておく。

なお、同論考のほか、公共圏、また戦後知の課題に関わるものとして、與那覇潤『歴

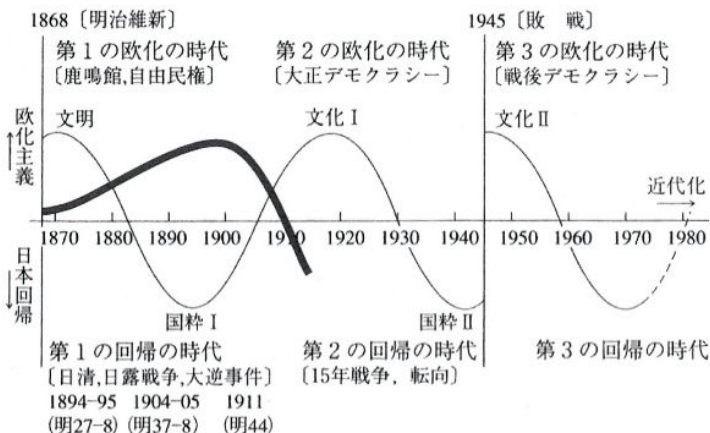


図 西川長夫「支配イデオロギーとしての欧化主義と日本回帰」に〈江湖の第三の波〉【太線部】を書き足す

史がおわるまえに』(亜紀書房、2019年)に掲載した、同氏との共著「歴史学に何が可能か『中国化』と『江湖』の交点」が刊行されたが、これは本研究以前の2012年の雑誌対談に対して加筆修正を加えたものであるため、詳細は省略する。

(3) 民主化を課題とした戦後歴史学から21世紀にいたる「近代性」探究の問題

次に、(2)から不可避的に派生する、学問史的問題を、研究開始当初の予測を超えて展開することが出来たため、ここにまとめておく。

まず論文「『幕府』論のための基礎概念序説」(『立命館文學』660号、2019年)は、戦後民主主義の歴史学において、天皇制の克服という課題に取り組んだ中世史研究者の二つの立場のうち、2017年に他界した歴史学者佐藤進一の研究を史学史的に再定位し、問題の継承を図った。

「『関東幕府』もしくは『東関柳営』」は、朝廷に対する独立性を徹底的に重視した佐藤の東国国家論を、最新次元で継承したものであり、「歴史学におけるヴェーバー受容の可能性」は、執権政治の合議制のなかに、専制、ひいては天皇制を相対化する可能性を見出そうとする佐藤史学の核心部分を、1960年代初頭の丸山眞男と石母田正・佐藤進一の研究の、共時性と相違点とを分析することを通じて正面から受けとめ、その議論を一歩さきへと進めた。

さて、同論文が、1960年前後、すなわち安保闘争期の歴史学を取り巻く学問状況に肉薄したのに対し、その前年発表した論文「シベリウスと日本史学—歴史の曲がり角としての1970年代」(『FINLANDIA(日本シベリウス協会会報)』58号、2018年)では、2018年に他界した歴史学者義江彰夫の、学問史的な再定位を通じて、1970年代の状況を三つに区分して論じた。すなわち、物語の終焉のなかで—1970-1972、団地の向こうに見えたもの—1974-1977、

中世へと旋回する世界—1977-1979、の三つである。とりわけは、原武史『滝山コミュニケーション1974』(講談社、2007年)が提示した議論のなかで、「歴史学者の東島誠は、中世日本に誕生した『公界』のような自治組織が、『既存の公権力に抗する形で勃興し』ながら、結局のところ上位権力と同質の『公(オオヤケ)』を作り出すにすぎなかったことを指摘している」と論じたことに対する、学問的応答であり、は、近代批判の文脈で非-近代としての中世が召還された、「新しい中世」1.0期の状況について、初めて論じており、前記(2)の研究を展開する推進力となった論考である。

以上の報告書をもって、本研究は閉じられるが、(1)の「序」に続く研究成果については、COVID-19の収束後を目途として、『つながり』の精神史』(講談社、2012年)以後10年の思索とあわせ、改めて一書に錬成し直す機会を得たい、と考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 東島 誠 | 4. 巻 55 |
| 2. 論文標題 「所属」からの自由 無教会・無縁・公共性（仮題） | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 内村鑑三研究 | 6. 最初と最後の頁 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |
| 1. 著者名 東島 誠 | 4. 巻 |
| 2. 論文標題 三つの「新しい中世」と公共圏 一九九〇年代の歴史学的思考と現在 | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 花田達朗『公共圏 市民社会再定義のために（花田達朗ジャーナリズムコレクション3）』（彩流社） | 6. 最初と最後の頁 407-418 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |
| 1. 著者名 東島 誠、與那覇 潤 | 4. 巻 |
| 2. 論文標題 歴史学に何が可能か 「中国化」と「江湖」の交点 | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 與那覇 潤『歴史がおわるまえに』（亜紀書房） | 6. 最初と最後の頁 95-147 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |
| 1. 著者名 東島 誠 | 4. 巻 660 |
| 2. 論文標題 「幕府」論のための基礎概念序説 | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 立命館文学 | 6. 最初と最後の頁 28-51 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 東島 誠 | 4. 巻 58 |
| 2. 論文標題 シベリウスと日本史学 歴史の曲がり角としての1970年代 | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 FINLANDIA (日本シベリウス協会会報) | 6. 最初と最後の頁 32-41 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計1件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件)

| |
|--|
| 1. 発表者名 東島 誠 |
| 2. 発表標題 「内村鑑三の『無教会』と日本思想史の文脈における『無所属』『無党派』の研究」から、「序・『所属』からの自由 無教会・無縁・公共性」 |
| 3. 学会等名 第35回内村鑑三研究セミナー (招待講演) |
| 4. 発表年 2021年 |

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|---------------------------|-----------------------|----|
|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|